月刊 あなたにこの本を！ 平成 26 年 4 月号

大阪市立図書館 「あなたにこの本を！」選定委員会

大阪市立図書館が購入した新しい本の中から、図書館員のおすすめの本を紹介します。

…字が大きめ　…中高生にも　…図・写真が多い

※価格のあとの（ ）内の番号は、大阪市立図書館書誌 ID です。

百年のしごと

塩沢　槙　著
東京書籍　1500 円　(0012761540)

ジャンル　:生き方・考え方に学ぶ

ヤンマーなどの企業から町の洋傘店まで、創業 100 年を越える老舗 20 社を紹介する。いずれも、仕事への真摯な姿勢とぶれない軸を持ちながら、時代のニーズに合わせて変化し、活路を見出してきた。濡れても使えるマッチの開発や、マスキングテープのルーツがハエ取り紙だったなどの挿話もおもしろい。東日本大震災で流された店の再建に取り組む醤油会社をはじめ、災害や戦争など様々な危機を乗り越えてきた歴史には、未来を生き抜くヒントがつまっている。〔335.2〕

科学の世界のスケール感をつかむ
ーもしも地球がメロンの大きさだったらー

小谷太郎　著　KAERUKOVA　画
ベレ出版　1380 円
(0012798176)

ジャンル　：　知識・教養を深める

本書は、太陽系から素粒子まで現代科学が明らかにした世界のスケールを、身近なものに例えて解説する。もしも地球がメロンの大きさだったら、太陽はメロンから1．5キロ離れた気球で、水星はイチジクになるという。他にも、原子の中心にある原子核がパチンコ玉の大きさだったら、花粉の粒子が100トンの重さだったらと思いもよらない想像を広げる。見開きいっぱいのイラストでわかりやすく表現されており、新しい視点で科学により親しむことができる。〔404〕

足元の小宇宙
ー82 歳の植物生態写真家が見つめる生命ー

埴　沙萌（はに　しゃぼう）　著
ＮＨＫ出版　1600 円　(0012848386)

ジャンル　：　自然・環境を考える

本書は、テレビ番組を元に新たな写真を加え、活動や日々の思いをつづった写真エッセイだ。著者は、植物の生の美しさ、生きる仕組みのすばらしさにひかれて植物生態写真家になった。身近な植物を見つめ続けることで発見した生態を、独自の工夫をこらし撮り続けている。ライトを逆光で当てた中にキノコの胞子がヴェールのように流れ出るさまなど、生命の輝きを切り取った写真の数々には息をのむ。普段見過ごしている植物の営みを、新たな眼差しで見つめたい。〔470.4〕

花森安治伝
ー日本の暮しをかえた男ー

津野海太郎　著
新潮社　1900 円
(0012844740)

ジャンル　：　生き方・考え方に学ぶ

本書は、戦後最大級の国民雑誌「暮しの手帖（てちょう）」の初代編集長、花森安治の評伝だ。30 年間、商品テストなどの企画や記事の執筆をほぼ一人で行った花森の万能ぶりを、元編集者の著者が敬意を込めて語る。また、花森が大政翼賛会宣伝部員として戦争に協力した一面にも迫る。戦中戦後を通して花森の内面を貫くのは、日々の暮らしを守りたいという思いだと著者は言う。自らの過ちを自覚しつつ、昭和を生き抜いた姿に心が揺さぶられる。〔Bハナモ〕

みんなの空想地図

今和泉隆行　著
白水社　2000 円
(0012834799)

ジャンル　：　知識・教養を深める

著者は、地図は情報を読み取るだけでなく、そこから周辺の環境や日常の生活を推測し、どんな景色が広がっているのかを想像することができるという。実際に全国を巡り、各都市を丹念に観察して、想像と現実の姿のズレを発見する楽しさにも触れる。著者が幼少期より描いた架空の都市「中村市（なごむるし）」の地図には、コンビニや病院、学校などの生活に欠かせないものが配置され、地図上を散歩する感覚を味わえる。地図の新しい遊び方を教えてくれる。〔290.1〕

交通事故学

石田敏郎　著
新潮社　700 円
(0012842169)

ジャンル　：　現代社会を見つめる

自動車の性能は良くなっているが、ヒューマンエラーがあるため事故はなくならない。著者は、できるだけ急ぎたいという運転手の心理など、交通事故の人的要因を分析する。運転は、認知、判断、操作の繰り返しで、その過程で間違いがあれば事故が発生するという。避けきれない事故もあるが、自分がどのような運転をしているかを知り、その原因を分析することで事故を防ぐことができると著者は主張する。多くのデータと論理的な解説により説得力がある。〔681.3〕

物語ること、生きること

上橋菜穂子　著　瀧　晴巳　構成・文
講談社　1000 円
(0012823091)

ジャンル　：　生き方・考え方に学ぶ

骨太のファンタジー作品で人気の作家であり、文化人類学者でもある著者が、半生を語る。「いい子」の自分に引け目を感じていた思春期の気持ちや、作家や研究者という生き方を選んだときの心情が率直につづられる。子どもの頃から作家になりたかったという著者が、同じ夢をもつ子どもたちに応えるために書かれた本書は、進路に悩む若者への力強いエールだ。居心地のいい現状に甘んじたくなる自分の背中を蹴っ飛ばして、夢を目指した著者の言葉が胸に響く。〔910.28〕